

勝林寺夕報

吉田兼好の「つれづれ草」にこんな話
が出ていきます。



がよつてしまひました

蓮如上人はご文草のなかでこう教えています。

本堂大屋根工事
着々進行

この話を書いたあとに兼好法師はつ
くすくと述懐いたします。

「人間一生のあいだにしたいことは
いくつもあるのだけれども、どのこと
がその中で一番大事なことなのかをよ
くよく考え定めて、そのほかのことは
勇気をもつて思い捨て、人生の一大事
にはげまなければならぬのだ。なぜ
なら、人のいのちはそんなには長くな
いのだから：」

「されば人間のはかなきことは、老少不定の塙なれば、たれの人も早く後生の一大事を心をかけて：：」
蓮如上人（本願寺八代目のご門主）の有名な「白骨のご文章」です。
これから生死にとつて何が一番大事なのか。この五十年六十年のいのちは一体なにをするためにあつたのか。
家のため、子どものため、愛のため、社会のため、國のため：：：しかし、そうしてくらしてきいた私の今までの一生に悔はないにしても、「私」は、「私のいのち」は取り落したまゝになつてはいいのか。

平生業成といいうのは、私のこのごのちへの底に、久遠のむかしから勵らいて下さつていた如来の願い（本願）に、「如来の無量ないのちに帰れ（帰命無量寿如来）とのよび声（念佛）」によびさまされ気づかさせられたその一瞬から、身はたとい罪業深重であろうとも、生きているそのままで如来の無量のいのちに生きる輝かしいいのちに生きかえるのであるといいう淨土真宗独特のおみのりです。

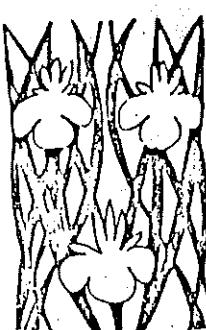
ゆるぎなく強く生きることのできるいのちの根拠、堂々と死んでいけるいのちの根拠を、ご本願とお念佛のなかに得させていたゞくおみのりが淨土真宗です。

一万、寄附券用に閑しましては、これもご門徒その他有様の皆様のご理解と、推進委員・代議員の方々を中心とする格別の努力により、すでに四月半には記帳をほとんど終つていただきました。
記帳額は、百八戸のご門徒で、毛千七万八千円。
その他も合算すると実に、毛千六十三万八千円になつております。（五月一日現在）
ご夫婦別々にご寄附いたゞいた方、お年寄りも加わつてくださつたお家、忠いもよらない遠いところからすぐに現金をおとどけくださつたかた。
それぞれの村、それぞれの家に、ことにこの不況の中の苦しい事状があることを承知しているだけに額の多少にかゝわらずもつたいたない心でいつはいで何卒この上ともご懇意を運び下さいませ。

さひちや いつまいる
へえ、わたしや なむあみだぶつた
いま まいらせてもうております
する
いのちの門が あくばかり
ごおんうれしや なむあみだぶつ

ある人が、どうでもこの子を法師にしたいと考えて、「お前、大きくなつたら、よく学問をしてものゝ道理をわきまえ、お経さまのゆいわれを人に説いて聞かすほどの説経師になつてくれ」とかねがね言うて聞かせて育てました。その子、いよいよ年ごろになつて、これからぬよいよ説経師になる勉強をしようと發奮したのですが、その時はたとえた。「私は乗り物をもつてはいない。どつかの家から馬がさしむけられて招かれたなら、乗らぬわけには参るまい。そのとき下手な乗りかたをして落馬でもしたならものわらいになつて情ないことにならなる。ひとかどの説経師として恥かしくないためにも、なにをおいても乗馬の術を身につければなるまい。それから、法事などに招かれて酒をすゝめられるこどももあるだろう。それは練習しなくとも何とかなるが、その中に全然芸のないのもせつかくお招き下さつた方もわびしく思われるだろう。そのためにも何か一つや二つの早歌（当時の流行歌）がうたえるようにしておかねば：」こういうわけてこの子、乗馬と早歌を習いはじめたのでしたが、年を積んでこの二つの道がだんだん上手になるにつれて、もつと上手にといふわけついよいよこの二つの道につとめはげんでいるうちに、名人とうたわれる程になつたものと肝心の説経を勉強する時がなへうちで年

「如來さまのご本願を、一心に疑いなく至心に帰命致しますと、もうその一瞬からいのちわざらうことなく、たとえそのときこの生命が終ろうとも、すでに如來さまのいのちに生きかえつてゐるのであり、もしもそれから何年生きたとしても、死ぬるその時まで、如來のいのちに生きかえつたよろこびとそのことを知らして下さつた如來さまのおよび声（念佛）への感謝の日日をおくらせていたゞくことです。このことが、浄土真宗の八平生業成のよいわれです」



葬儀のこと

中陰法要

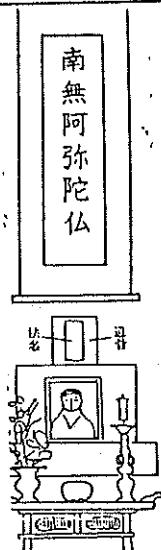
火葬の場合、お骨は、お仏壇わきの床に「中陰壇」をしつらえてそこに次のように安置します。土葬の場合遺骨はありませんが、その時にも写真を安置します。(浄土真宗では本来「位牌」は用いないことになっていますが、習慣としてそれをおまつりしてもかまいません)

さてその「中陰壇」ですが、先ず第一に大切なことは床正面には「南無阿弥陀仏」の六字名号か如来さまの尊像の掛軸をかけます。その前に二・三段つくつて白布でおよい、その最上段に遺骨を安置します。その遺骨箱の正面に法名を書いた紙をはるのが正式ですが、最近では多々遺骨の前に位牌を立てています。また、この前に故人の遺影を掲げてもよろしい。

壇の前には卓をおき三具足(右からローソク立て・香口)を置きます。

なお、「中陰壇」を設けた場合でも、お仏壇は必ずおまつりしておかなければなりません。七日参り(「中陰勤行」といいます)・忌明法事のおつとめはお仏壇で行ないます。

さて、「中陰」(七七、四十九日)ということはもともと仏教がうまれる以前から古いインドで行なわれていた俗信が日本にもち込まれているのです。それによりますと、人間がこの世の生命を終えて(これを死有といいます)次の生命を得る(これを生有といいます)までの期間の生命(



淨土真宗では私たちが善根を積んで故人に回向供養してあげようなどという思い上つた心をむしろいまします。「中陰」という習慣上のしきたりは残しますが、お勤めする心がまえは全く違はなければなりません。

供養されるのは残った私たちです。

肉親の死によつて、はじめて人生の無常を思ひ知られました。

あるいは死に会つてはじめて、親の慈悲・人のご恩に気づかせていただきます。

平常思つてもみないこうしたことを、七日七夜のご法話の中かで聞かしてもらい、人生の悲嘆のなかにお念仏を通して大きな如來の願いがあつたことに気づかせていたらしくのです。

故人の死が、私をご本願の前に招き寄せて下さる、その場が中陰法要であると浄土真宗は考えるのです。

これは長くても七×七の四十九日間といわれます)を「中有」というのです。

この「中有」の間中、遺族は特に悪い行為を忌み善行を積んでその功德を回向し供養(おそなえ)して後生の幸を願わねばならないとされています。

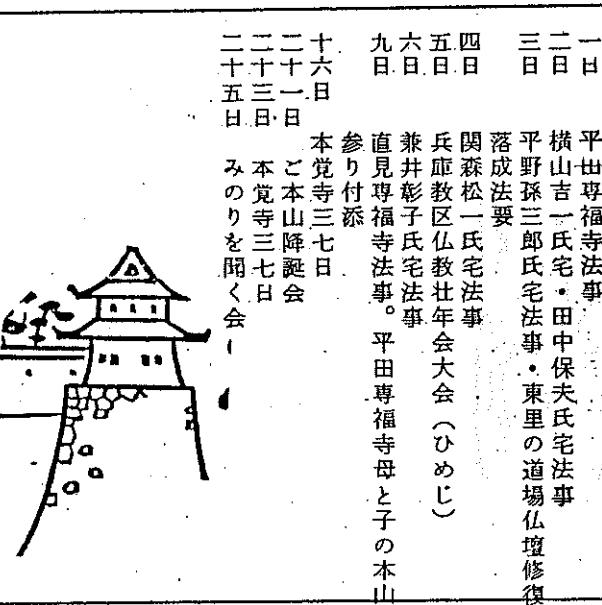
「忌中」であるとか「追善供養」ということばはそういう意味から生れたことばです。



仏社・仏婦だより

佛社・仏婦の皆様四月十八日・二十五日の本堂大層根改修工事のご奉仕、ほんとにご苦労様でした。おかげ様でその後の工事が円滑に進んでおりました。ありがとうございます。

四月二十五日の研修会・觀桜会にも、ご協力有難うございました。五十名の参加を得て盛大有意義に春の夜のひとときをすごしました。皆様のご協力にあらためて感謝申し上げます。



五月のこと

一日	二日	三日
二日	三日	四日
四日	五日	六日
五日	六日	七日
六日	七日	八日

平出専福寺法事 横山吉一氏宅・田中保夫氏宅法事
平野孫三郎氏宅法事・東里の道場仏壇修復落成法要
関森松一氏宅法事
兵庫教区仏教社年会大会(ひめじ)
兼井彰子氏宅法事
直見専福寺法事・平田専福寺母と子の本山参り付添
本覚寺三七日
ご本山降誕会
本覚寺三七日
ご本山降誕会
みのり聞く会
直見専福寺法事・平田専福寺母と子の本山参り付添
本覚寺三七日
ご本山降誕会
本覚寺三七日
みのり聞く会

日程	六月五日(土)	六月六日(日)	六月七日(日)
乗物	全但バス・水中灘船		
参加費	二万円		
宿泊	西日光「耕三寺」		
申込	尾道「ホテル金花園」		

念仏奉仕団
「念仏奉仕団」は十七年間続いている出石組連合佛教婦人会の重要行事です。
一年に一度はご本山へということで、そのなかに奉仕作業と研修・見学を編り込んで行なつてきました。そして最近は年間亡くなられた方のご遺骨を、みんなでお供して親鸞様の墓所である大谷本廟に納骨することにしています。
こぞつてご参加下さい。
期日 六月二十八日(月)・二十九日(火)
参加費 一万一千円

行事	奉仕作業・本山拝観・ご法話
申込	納骨式・帰敬式・三十三間堂
五月二十日迄	西日光「耕三寺」